

(薩摩郡入来町浦之名鹿村ヶ迫)

位置と環境

鹿村ヶ迫遺跡は入来町浦之名鹿村ヶ迫に所在する。場所は、入来町の中心部である牟多田の交差点から(県道41号川内ー加治木線)川内に向かう途中の東部消防署西側の中之原台地上に所在する。

本遺跡は、昭和63年度に分布調査を実施した折り、鹿村ヶ迫A、Bの2か所の遺跡が発見された。採集された遺物は縄文土器、石鏃であった。

遺跡は、樋脇町と隣接しており、入来町名を鹿村ヶ迫遺跡、樋脇町名を神ノ原遺跡として扱っている。

調査の経緯

中之原台地において、県営過疎基幹農道整備事業(中之原第3期地区)を川内耕地事務所が計画した。それに伴い、計画区域が周知の遺跡地内であったため、工事計画範囲である入来町教育委員会が主体となって遺跡の範囲・性格等をつかむために、県教育委員会の協力を得て確認調査・本調査を平成6、7年度に実施した。

まず、確認調査を実施し、入来町鹿村ヶ迫遺跡A、Bからは、数点の遺物と近世の溝状遺構は発見されたものの工事に支障はなかった。しかし、樋脇町の神ノ原遺跡周辺から旧石器時代細石刃文化期の遺物が出土した。このことから、工事範囲が入来町であったため、神ノ原遺跡を鹿村ヶ迫遺跡として本調査を実施した。

遺構と遺物

調査区域においては土層横転が著しかったので、遺物は多少移動していることも考えられる。

遺構は、旧石器時代細石刃文化期の落とし穴2基、



第1図 鹿村ヶ迫遺跡の位置

縄文時代の土坑1基、住居跡1軒を検出した。(第3図1・2号落とし穴、第4図住居跡・土坑)

旧石器時代細石刃文化期の1号落とし穴の埋土はVI層が堆積しており、埋土の中から黒曜石片が出土した。しかし、細石刃等の製品は確認できなかった。

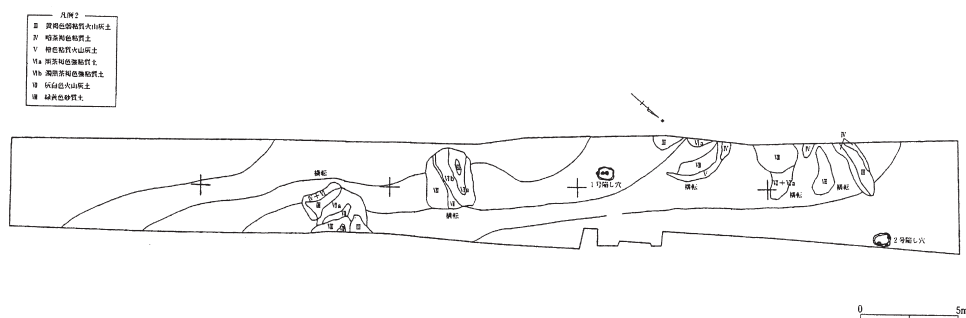
底面に2本の杭跡(逆茂木)がほぼ垂直に差し込んであった。杭跡は、落とし穴の長円形に対してほぼ中心に並んで出土しており、均等に作出してあった。

落とし穴検出面はVII層(シラス)であったが、底部はIX層中間部まで続いており、杭跡は、深さ40~50cmを測り、下の固い砂層までおよび、逆茂木痕が確認できた。

2号落とし穴は、検出上面は現道部分において掘削されていたが、VI層が埋土として堆積していた。

やや円形で底部より3本の杭跡を検出したが、1号落とし穴のように明瞭な杭跡ではなかった。杭跡は中心部ではなく円周部にランダムに設置されており、杭跡の深さ、幅も均等ではなかった。2号落とし穴からの遺物の出土は確認できなかった。

遺物は旧石器時代細石刃文化期のもので、その主なものは、細石刃、調整剥片、細石刃核(第5図1



第2図 遺構配置図

～7), 細石刃核ブランク (第5図8), 石核, ハンマーストーン, スクレイパー, 楔形石器である。石器はほとんどが黒曜石を使用していた。本遺跡で使用している黒曜石は9割以上が上牛鼻産である。

住居跡は, 竪穴住居跡で, 埋土は落とし穴等と若干の差異があり旧石器時代の層と異なっていた。住居跡は長方形を呈しており, 四隅はやや丸みを帯びていた。周辺及び底部にピットを伴っており, 住居跡内に3基, 外に2基のピットが確認されていた。

土坑は東中央部のⅦ層上面より検出した。埋土はⅢa層とⅦ層との混土であった。遺物の確認はできなかった。土坑は楕円形を呈しており, 正体は不明

である。

特徴

旧石器時代細石刃文化期の落とし穴が2基検出され, 当時は, 県内で3例目の発見であった。

また, 遺物も旧石器時代細石刃文化期の遺物が出土した。

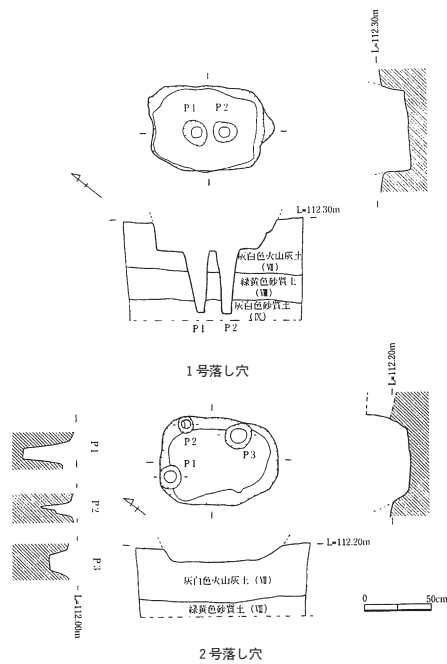
資料の所在

出土遺物は, 入来町教育委員会に保管されている。

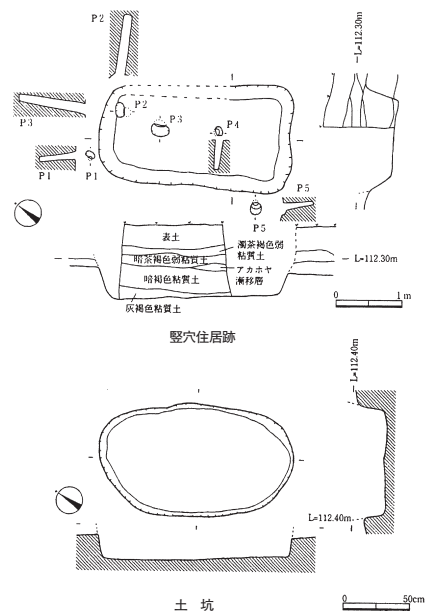
参考文献

入来町教育委員会1990『入来町内文化財分布調査概報 (総集録)』

(藤井法博)



第3図 1・2号落とし穴



第4図 住居跡・土坑



第5図 出土遺物